－原著－

地域医療機関における，生産的歯科医療実践のための総合的システムの確立
－非協力的な患者に対する，本システムの実施と効果－

藤　巻　秀　敏

新潟大学歯学部歯科保存学第一講座
（主任；岩久正明　教授）

Establishment of a comprehensive system for productive dental treatment in a local community
Application and effectiveness of a comprehensive system for productive dental treatment in uncooperative patients

Hidetoshi Fujimaki

Department of 0perative Dentistory and Endodontics, Niigata University School of Dentistry
(Chief: Prof. Masaaki Iwaku)

平成12年5月27日受付　　6月1日受理

Key words：symptomatic therapy, causal therapy, productive dental treatment

Abstract

Abstract:Dental treatment has been greatly advanced under the material civilization and development of modern technology. As the so-called 8020 campaign, the effort to keep at least 20 good teeth of one's own at the age of 80, appeals, it is now a social request, in this age of increased longevity, to try to preserve teeth rather than pull them out.

For a number of reasons, however, dental treatment in local communities has been forced to place more importance on 'symptomatic therapy' to get rid of pain than 'causual therapy' where we try to preserve as many teeth as possible. That means, in such communities, there still is a great gap between the ideal treatment which dentists aim for and that which patients demand.

Therefore, it is very important and pressing for us to establish a comprehensive system to allow our ideal treatment to be accepted and practiced. The author has been making a study on a practical method to fill the gapand change the treatment from 'symptomatic' to 'causual'. Concidering it themost important to have patients understand the advantages of causual therapy,the authoer has been trying to establish an effective way to give patients the information they really need.

As a result of this series of studies, it has been proved that the method taken here has had sufficient effectiveness even on uncooperative patients.

If this method was practiced on a larger number of patients, and used to provide life-time dental care as an effective way to make the treatment more productive, the author believes that it could have a great impact on the field of dental treatment for the 21st century.

キーワード：対症療法，根本療法，生産的歯科医療

要旨

歯科医療は，物質文明と学問・技術の進歩のなかで，大きな発展をとげてきた。そして，現在進行中の８０２０運動でも現われているように，歯を保存する医療の提供の必要性が，今日長寿社会を迎えたわが国にとって，強い社会的要請になってきている。

しかしこれまで諸般の理由から，地域医療現場では，歯を残す為の根本療法というより，むしろ苦痛を除く対症療法的医療として提供される傾向にあった。すなわち，地域歯科医療における歯科医療従事者の理想と現実との間には，なおかなりの隔たりがあり，理想を現実にする為の具体的な方法論の構築の必要性に，我々歯科界は迫られている。

そこで筆者は，これまで，そのギャップを埋め，歯科医療を根本療法にする為の具体的手法の構築に取り組んできた。すなわち，歯を残すために必要な医療と，患者の主訴（今までの歯科医療）との間に，その理解の上からも大きな開きがあり，そのギャップを埋めることが，歯科医療を根本療法にする為に，まず必要な事の一つと考え，患者に必要な情報をどのように伝え医療を実践すればよいか，それを具体的な方法論として検討してきたのである。

その結果，本試みは，非協力的な患者に対しても，成果をあげ得ることが実証され，また，もしそれが，より多くの患者に実践され，そして長いライフステージの中で途切れない医療として提供可能であれば，21世紀に向けて，歯科医療をより生産的な存在にする為の有効な手段の一つとして，更に歯科医療の在り方変える一手段として，一石を投ずるであろう。

緒　　論

戦後の物質文明や学問の進歩の中で，新器材や新技術の導入により，歯科医療の分野では，優れたテクノロジーが確立されてきた。その間，経済の発達に伴う国民生活の安定，国民の健康意識の増大，国民皆保険制度の施行などによる潜在患者の顕在化が急速に進み，歯科医師不足の中で，治療の合理化，能率化が模索され，早期発見・早期治療・疑わしきは削除のう蝕治療への工学的ともいうべき近代的アプローチが進行した。しかし，現在わが国のう蝕の発生率，歯の喪失率など必ずしも大きく改善されてきたとはいい難い[1)～4)]。また，歯周治療に関しては，基礎医学も，その治療学も，予防法もかなり進歩し，治療のシステム化もはかられ，保険の導入もなされてきた。しかしそれにもかかわらず，一ケースでもいわゆる型診療に取り組むことのできた歯科医師は，全体のわずか数％にすぎなかったといわれている。つまり，物質文明や学問の進歩の中で，歯科医療は，歯や歯周組織を保全し，歯を残すための「根本療法」というより，むしろ「対症療法的医療」という形でしか提供されてきていないようである[4)～8)]。

また，わが国は，数字の上では世界最長寿国といわれているが，多くの寝たきり老人を抱えてその福祉行政も遅れており，今や，真の長寿の意義が問われている。その中で，人々が歯科医療に期待している役割は，「おいしく食べ，楽しく話す，心豊かな長寿」を可能にする内容を提供することであろう。それは，現在活動が続けられている「8020運動」に端的に現われている[4,9)]。

筆者は，この様な理想と現実とのギャップを埋めるという観点から，歯科医療をもっと分かりやすく，そしてやさしく合理的に届ける技術が，患者にとっても，治療者である我々にとっても必要であると考えるに至った。すなわち，歯科医療を苦痛を取り除く「対症療法的医療」から歯を残すための「総合的根本療法」として提供する為には，早期の内に，必要な歯科的処置と，予防処置を有機的に施し，しかも，それをあらゆるライフステージで提供する必要があるが[2,3)]，しかし現実には，患者の主訴への対応と歯を残す為に必要な医療との間に，その理解の上からもかなりの開きがあったり，様々な事情で，必要な医療が患者に提供できないことも少なくないからである。

そのため，必要な医療を総合的能率的に提供するための具体的な方法論の構築が急がれ[2,3)]，著者はそのシステム化に取り組んでいる。その一環として，従来の「保存」「補綴」……といった枠組みを取り外し，歯科治療を，歯周治療とう蝕治療を中心にプログラム化し，その他の歯科的処置もその中に組み込んだ。そして，更に歯科医療を長いライフステージの中でとらえ直し，日常臨床を実践しやすいよう，様々な工夫をし，そのシステム化に努めている。すなわち，それに従ってこそ，よりよい治療を施し，予防手段を教え，健康を長期にわたり持続させることが出来るからである。

今回は，その一部について内容を紹介し，また，歯髄炎で来院し，主訴が解消した後中断した，いわゆる非協力的な患者が，その後再来院し，当医院のシステムのもとで，必要な処置を施し経過観察を行っているケースを例に報告し，そのシステムの内容について考察したい。